

令和 3 年 6 月 27 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K04493

研究課題名（和文）感情から読み解く中心市街地の都市環境のあり方に関する研究

研究課題名（英文）Study on the city center's built environment from the emotional aspects

研究代表者

伊藤 香織（ITO, KAORI）

東京理科大学・理工学部建築学科・教授

研究者番号：20345078

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、中心市街地の都市環境と市民が中心市街地に対してもつ感情との関係を明らかにし、現代都市における中心市街地の意味を再考することである。まず、全国14都市のアンケート調査の分析から、中心市街地の環境や評価と中心市街地への好ましい感情との関係を明らかにした。より多様で詳細な感情を捉えるために、愛知県岡崎市において市民インタビュー調査を行い、その結果を踏まえて、愛知県岡崎市及び愛媛県高松市在住者を対象に、中心市街地での記憶と感情に関するwebアンケート調査を実施した。調査結果の分析により、中心市街地に対する感情の度合いが年を経るに従って薄れてきていることが定量的に示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

都市政策では中心市街地再生が求められているが、中心市街地ならではの生活を定着させるためには、市民感情の観点からも中心市街地再生のあり方を検討することが不可欠である。本研究によって、広く課題となっている空洞化というハード面だけでなく、中心市街地が感情の拠り所としての役割を失ってきたということが明らかになり、そのうえで、体験の記憶の重要性が示唆されたことは、今後の中心市街地再生のあり方に手掛かりを与えるものである。

学術的には、「感情の地理学」など近年感情に対して新たに学術的な視線が注がれる中、都市計画学の分野で、感情を客体化し、定量的に都市との関係の一端を明らかにしたことに意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study is to examine the relationships between the built environment of a city center and people's emotions towards a city center.

An analysis of the questionnaire survey data from 14 Japanese cities revealed the relationships between the favorable emotions and the built environment of a city center. In order to grasp more various emotions, we interviewed people living in Okazaki City. Then we conducted a questionnaire survey of people living in Okazaki City or Matsuyama City on memories and emotions in the city center. A multivariate analysis revealed that measures of the emotions tend to decrease as time elapses.

研究分野：都市計画学

キーワード：中心市街地 感情 記憶 都市環境 年代

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本社会が人口減少と急速な高齢化を迎える中で、持続可能な都市づくりのために、中心市街地は、都市の機能を集約し再び密度を高めていくべき場所として、再構築が求められている。中心市街地に関する研究は2000年代以降に増加しており、特に2010年代になって多くの研究が見られ、都市政策とも連動している。都市政策の観点からは中心市街地の重要性は増しているが、市民にとって中心市街地はどのような意味をもつのだろうか。かつての中心市街地は市民が特別な感情を抱く場所であった。しかし、モータリゼーションと郊外化が進み、商業やサービスが均質化するとともに、中心市街地に対する特別な感情は希薄になっている。その結果、まちなか居住推進のもと利便性と優遇策によって駅前高層マンションの居住者が増えても、偶々それが中心市街地にあるというだけで、自家用車で郊外に買い物に行くような生活をしている者も少なくない。中心市街地ならではの生活の楽しみや中心市街地に対するエンゲージメントがなければ、中心市街地は求心力を保ち続けられないだろう。均質化の進む現代社会で、どのような中心市街地が、どのような感情の拠り所となり、求心力を維持できる場所となるのだろうか。中心市街地に関する研究では、居住者数、歩行者数、売り上げ、地価などでその性質を表し、あるいは施策の効果を測ることが多い。しかし、それらだけでは表しきれない中心市街地の性質があり、市民の感情などに表れる中心市街地の意味を問う必要があると考えた。「感情の地理学」にみられるように、近年感情に対して新たに学術的な視線が注がれる中、都市計画学の分野でも、感情を客体化し、フィジカルな都市との関係を探求することには意義があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中心市街地のフィジカルな都市環境と、市民が中心市街地に対してもつ感情との関係を明らかにし、現代都市における中心市街地の意味を再考することである。現在、都市政策の観点から中心市街地の重要性は増しているが、市民にとって中心市街地はかつてのような多様で濃密な感情の拠り所ではなくなってきている。現代都市にも中心市街地ならではの生活の楽しみやエンゲージメントがなければ、いくらまちなか居住を促しても、中心市街地は求心力を保てないであろう。近年の研究動向としては、「感情の地理学」の研究分野が興るなど、感情を学術的に扱うことの重要性が指摘されている。本研究では、感情と都市環境を結びつけて、中心市街地のあり方を読み解く。まず、インタビュー調査によって中心市街地に対する感情の抽出・分節とマッピングをした上で、アンケート調査によって中心市街地の都市環境及び生活行動と感情との関係を分析する。

3. 研究の方法

(1) 中心市街地の評価と好ましい感情

全国14都市の市民を対象にしたアンケート調査より、中心市街地の都市環境や中心市街地に対する評価が、中心市街地への好ましい感情(選好、推奨、誇り)にどのように影響するかを多変量解析を用いて分析する。

(2) 中心市街地に対する感情の定性的調査(インタビュー)

中心市街地に対して抱く感情がどのように変化してきたかを定性的に捉えるために、中心市街地再生に取り組む愛知県岡崎市において、市民インタビュー調査を行う。中心市街地で活動する市民を中心に呼びかけを行い、ワークショップ形式で中心市街地の大地図を囲んで、中心市街地での過去の思い出と感情、現在のまちの使い方と感情を聞き取って記録し、場所・行為・感情で整理する。

(3) 中心市街地に対する感情の定量的調査分析(アンケート)

定量的分析につなげるために、(2)のインタビュー調査の結果から中心市街地に対する感情を抽出し、アンケート調査設計をする。愛知県岡崎市と愛媛県松山市在住者を対象に、中心市街地での思い出とそれぞれの年代での中心市街地に対して抱く感情等についてwebアンケート調査を行い、感情の変容を定量的に分析する。

(4) 体験の記憶と地域愛着

体験の記憶と地域愛着との関係を明らかにするために、大学卒業生が都心の大学キャンパス周辺地域に対してもつ地域愛着について、東京理科大学神楽坂キャンパス及び法政大学市ヶ谷キャンパスの卒業生を対象にwebアンケート調査を行い、多変量解析を行う。

4. 研究成果

(1) 中心市街地の評価と好ましい感情

全国14都市のアンケート調査の分析より、居住年数や中心市街地への訪問頻度は、中心市街地への好ましい感情(選好、推奨、誇り)に対してほとんど影響を及ぼしておらず、過去(5年

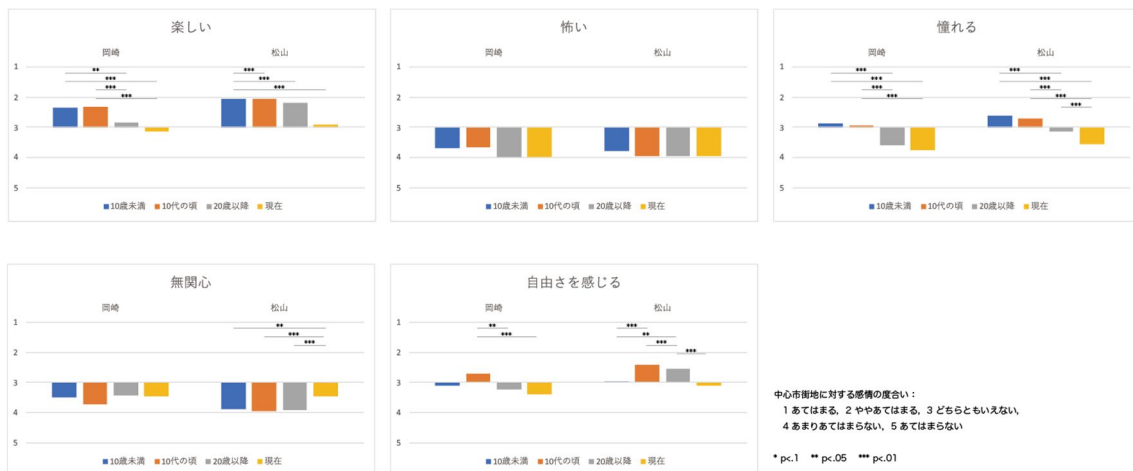
前，10年前，20年前）に比べて訪問頻度が増加した人の方が好ましい感情を持つこと，中心市街地にお気に入りの場所（小売店，飲食店，オープンスペース）があることや中心市街地に美しさ，歴史性，自然，個性を感じられることが，中心市街地に対する好ましい感情につながるということがわかった。

(2) 中心市街地に対する感情の定性的調査（インタビュー）

中心市街地再生に取り組む愛知県岡崎市において，17人の市民に対するインタビュー調査をワークショップ形式で行った。中心市街地での過去の思い出と感情，現在のまちの使い方と感情を聞き取って記録し，場所・行為・感情で整理した。過去については，商業施設，オープンスペース，娯楽施設に関する言及が多く，ほとんどのエピソードは，人（親，友人，恋人，同じ・別の学校の生徒，商業従事者など）との関係を交えて語られた。付随する感情としては，期待感，憧れ，楽しさ，優越感などに加えて，不安や恐れが混じることがわかった。現在については，河川，公園，公共施設などへの言及があったが，感情の表現は少なかった。インタビューから抽出された中心市街地に対する感情に，人の感情のベーシックな類型を加えて，感情を表現する20の言葉に整理した。

(3) 中心市街地に対する感情の定量的調査分析（アンケート）

愛知県岡崎市と愛媛県松山市在住者を対象に，10歳未満，10代，20歳以降，現在の4年代に分けて，中心市街地での思い出と中心市街地に対して抱く感情等についてwebアンケート調査を行った。その結果，両市とも，多くの種類の感情の度合いが，年を経るにつれて小さくなっていく傾向が観察された。多重比較法により，年代ごとの感情の度合いの平均の差を検定した。その中から，5種の感情の結果の例を図に示す。「楽しい」にみられるように，岡崎市では，10歳未満・10代と20歳以降・現在との差の平均が有意になる感情が多く，松山市では，現在とそれ以外の年代との差の平均が有意になる感情が多く見られた。



図：中心市街地に対する感情の度合いの年代による差（岡崎市，松山市）

回答者の年齢だけでなく，1969年まで，1970-1984，1985-1994，1995年以降，現在で時代分けすると，両市とも現在とそれ以外の時代との差が有意に認められる感情が多く，特に松山市でその傾向が強く見られた。

(4) 体験の記憶と地域愛着

中心市街地での体験の記憶が感情に結びつく傾向に示唆を得て，記憶に着目して，人生の中で一時的に過ごす場所に対する愛着の調査分析を行った。東京理科大学神楽坂キャンパス及び法政大学市ヶ谷キャンパスの卒業生各200人を対象にwebアンケート調査を実施し，キャンパス周辺地域での在学時の記憶や地域愛着について問うた。得られた結果に対して多変量解析を用いて記憶と地域愛着との関係を分析した。まず，因子分析によって，在学時の記憶は「場面」に関わる因子，「行為」に関わる因子，「体感」に関わる因子から成ることが示唆された。次に，分散構造分析によって，「場面」記憶と「体感」記憶は地域愛着に直接的及び「大学への愛着」を介して間接的に結びつくことが明らかになった。さらに，「場面」記憶は地域愛着の「親近感」因子に，「場面」記憶は地域愛着の「関心」因子により影響が強いという結果が得られた。

(5) 総括及び今後の展望

これらのことから，中心市街地に対する感情の度合いが年を経るに従って薄れてきていることが定量的に示された。ただし，「年を経る」については，都市の時間（中心市街地の空洞化などの変化）だけでなく，人の時間（子どもの頃，若い頃の体験）との関わりも強いことが示唆された。

さらに、体験の記憶がその後の地域への感情に影響を及ぼすこと、特に、誰と何をしたか、という記憶の内容よりは、どんな環境だったか、どんな感覚や感情をもったか、を記憶していることが重要であることが明らかになった。

したがって、現在の中心市街地が感情の拠り所ではなくなっているという仮説が実証されたとともに、単に人口密度を取り戻すだけでなく、未成年の時期に印象的な体験ができるような中心市街地を目指すことが、市民感情面での中心市街地再生に重要であることが示唆された。ただし、本研究では時間の経過、時代の変化、年齢による効果などを十分に弁別できていないため、さらなる調査分析が必要である。また、今後は、都市のフィジカルな環境や人の地域での行動と感情との関係についても引き続き調査分析を進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 伊藤 香織	4. 巻 54
2. 論文標題 シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 都市計画論文集	6. 最初と最後の頁 615～622
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11361/journalcpj.54.615	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤香織	4. 巻 43(3)
2. 論文標題 都市への思いをモデル化する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 計画行政	6. 最初と最後の頁 7-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高梨淳・一谷和希・松下耕太・伊藤香織・Andrew Burgess
2. 発表標題 中心市街地活性化基本計画における事業の集積に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小山朝子・齋藤匠・伊藤香織・Andrew Burgess
2. 発表標題 ストリートパフォーマーにより見出される公共空間の特性
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中谷柁介・常泉佑太・田邊真弓・伊藤香織・Andrew Burgess
2. 発表標題 青山通り周辺地区における個人商店の持続と建替に関する研究：その1 個人商店の建替状況
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 常泉佑太・田邊真弓・中谷柁介・伊藤香織・Andrew Burgess
2. 発表標題 青山通り周辺地区における個人商店の持続と建替に関する研究：その2 個人商店と地域コミュニティの関係性
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上野亜耶，伊藤香織，高柳誠也
2. 発表標題 中心市街地におけるお気に入りの場所と地域愛着の関係：水戸市中心市街地を対象として
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 須藤里佳，伊藤香織，高柳誠也
2. 発表標題 青山地区における空間変容と場所認識に関する研究：児童期の遊びを中心とした行動の記憶から
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡村隼多, 金沢優輝, 伊藤香織, 高柳誠也
2. 発表標題 大学キャンパス周辺地域の記憶と愛着に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kaori ITO
2. 発表標題 What Elements Can Be Regarded as Sources of Civic Pride?
3. 学会等名 the 34th International Geographical Congress (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------